

第Ⅲ章 飯田古墳群をとりまく環境

1 節 自然的環境

1. 地理と地勢

長野県は本州のほぼ中央に位置し、飛騨山脈・木曽山脈・赤石山脈をはじめ高山が点在することから日本の屋根と形容される。日本の屋根を源流とする小河川は、合流して天竜川・木曽川・千曲川の大河川となり、太平洋や日本海に注いでいる。河川は道としても機能し、海岸部から遡ると長野県に至る。太平洋側から遡上する天竜川水系・木曽川水系、日本海側から遡上する千曲川水系では、流入する文化等の違いから地域特有の文化が育まれている。

史跡飯田古墳群は、天竜川が中央部を南流する伊那谷南部に位置している。弥生時代においては天竜川下流域の三河・遠江地方との交流であったが、古墳時代から律令時代においては内陸（陸上）交通路である東山道の通過地となり、東西日本を結ぶ地として重要視された。当地域が本州中央部にあって、東西日本の境界そして出入り口にあたる地理環境に起因している。

気候的には内陸性の中央高地式気候である。平成21（2009）年から平成30（2018）年までの過去10年間における平均気温は13.06℃、平均年間降水量は1744.6mmで降雪は少なく、平均年間日照時間は2094.7時間、平均年間霧発生日数は27.4日である（気象庁ホームページ）。日照時間が長く、県内でも比較的温暖な地域である一方、夏と冬の気温差が大きく、霧の発生日数は全国屈指である。

2. 地形

伊那谷南部は、天竜川を挟んで東西の氾濫原、その上の複数の段丘面、山麓部の扇状地が基本の地形である。ただし、名勝天龍峡以南は、美濃三河高原の山間地につながる起伏が激しい地形である。

複数の段丘面は、毛賀沢川以北の飯田市域では比高差70～80m前後の段丘崖で2分でき、山麓側は上段、天竜川側は下段と呼んでいる。また、段丘面は天竜川の支流によって区切られ、行政境や地区境になっている。伊那谷北部の上伊那郡も基本的には同様の地形であるが、段丘面が広い点で史跡飯田古墳群が所在する伊那谷南部一帯とは異なっている。

（1）地形区分

当地域は基本的に段丘地形を特徴とする。天竜川右岸（以下、「竜西^{りゅうさい}」という）では山麓扇状地が発達しているが、左岸（以下、「竜東^{りゅうとう}」という）ではそうではないといった違いがみられることから、竜西・竜東それぞれについて地形を細分（以下、「A～I地形」という）し、模式図を示す（図10）。

1）竜西の地形細分

○段丘崖で上段・下段に2分される座光寺・上郷地区、下伊那郡高森町大島川以南（A地形）

山麓部には扇状地が連続して形成されている。上段は東への緩傾斜地で、火山灰が堆積し、水利には恵まれないが、山麓部周辺には小規模な湿地性の低地がある。一方、下段は複数の小段丘面があり氾濫原も含めて広い。湧水が豊富で水利に恵まれている。上段をA1地形、下段をA2地形と区分する。

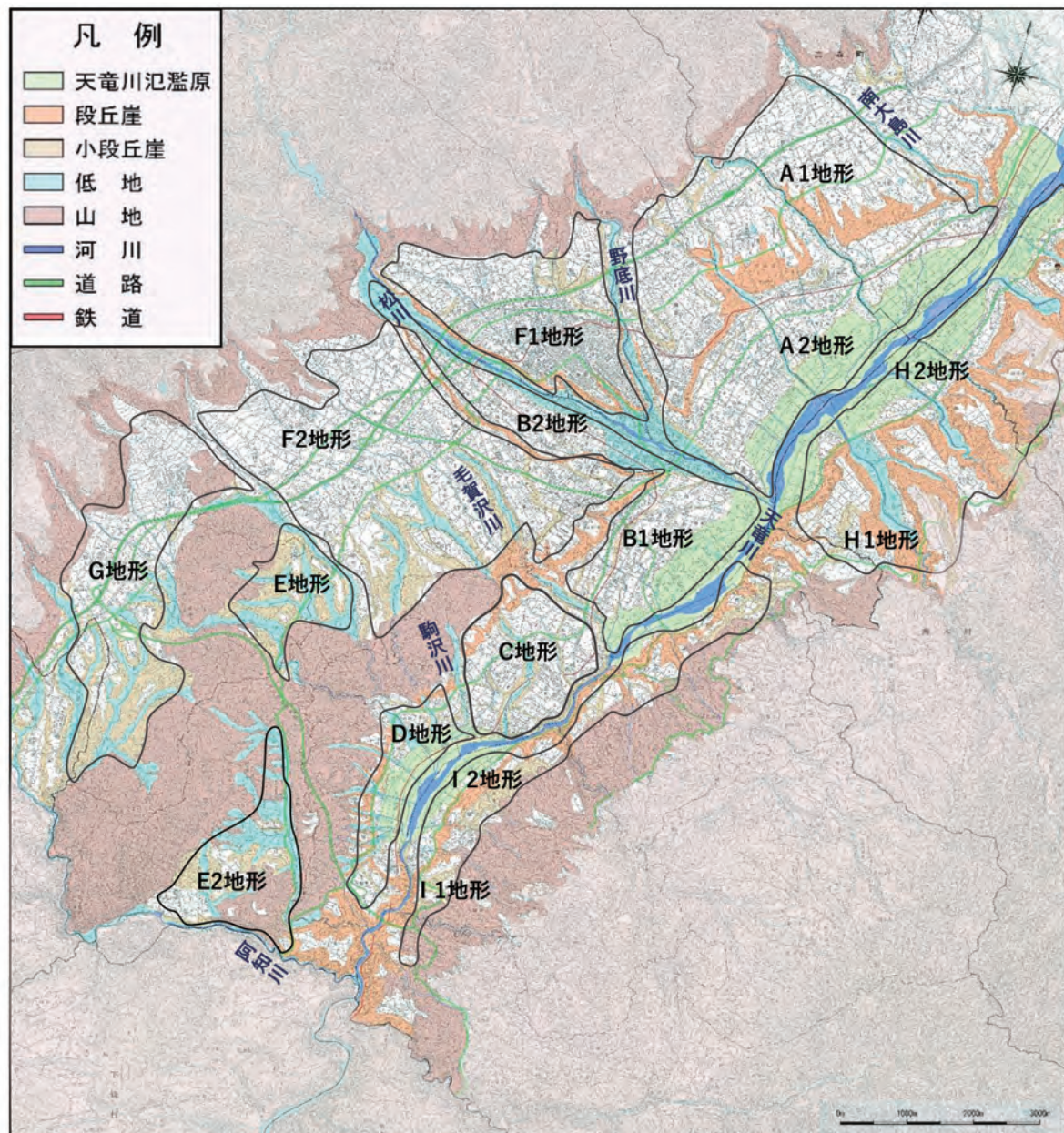


図10 飯田市域の地形区分模式図（地形区分は本文による）

○天竜川及び松川が形成した段丘面上の松尾・鼎地区（B地形）

天竜川及び松川が形成した複数の段丘面があり下段にあたる。天竜川・松川の氾濫原も含めて広く、湧水も豊富で水利に恵まれている。松尾地区をB 1地形、鼎地区をB 2地形と区分する。

○氾濫原を有しない毛賀沢川以南、駒沢川以北の竜丘地区（C地形）

段丘面が直接天竜川に接する下段にあたり、天竜川の氾濫原を有していない。段丘面上に湿地性の小規模な低地はあるが、水利にはあまり恵まれていない。

○駒沢川以南、天龍峡以北で氾濫原を有する竜丘・川路地区（D地形）

鷺流峡出口から天龍峡の狭窄部手前までの広い氾濫原を有している。川路地区の段丘面は、駒沢川と久米川間の段丘面ほど広くない。現在、氾濫原は天竜川治水対策事業によって盛土され、地形は大きく変貌している。

○水晶山・城山山塊東麓で盆地状の三穂地区（E地形）

水晶山・城山山塊と三穂丘陵に挟まれた盆地状の地で、山塊から伸びる尾根部と小河川の掘り込みによる低地が形成され、複雑な地形を呈している。

○段丘面上を複数の小河川が東流する飯田市街地・伊賀良地区（F地形）

A 1 地形と同様で、山麓部の扇状地に連続して形成されている。段丘面上を小河川が東流している点、比較的大きな湿地性の低地がみられる点でA 1 地形とは異なる。場所によって火山灰や砂礫の堆積があり、土壌や水利の環境に多様性がみられ、一見平坦にみえても東西方向の細長い低地と尾根地形が繰り返している。飯田市街地をF 1 地形、伊賀良地区をF 2 地形と区分する。

○複数河川による扇状地と浸食台地の山本地区（G地形）

木曾山脈と水晶山・城山山塊に挟まれた盆地状の地で、中央に分水嶺がある。分水嶺北側は複合する扇状地が、南側は火山灰が堆積する台地と小河川によって掘り込まれた低地が形成されている。



写真 4 史跡飯田古墳群が分布する竜西の遠景（北東側から）

2) 竜東の地形細分

○段丘面が雛壇状の下伊那郡喬木村・豊丘村（H地形）

段丘面が雛壇状に連続する。A地形と同様に70m前後の段丘崖によって、下段と上段に2分される。下段は氾濫原を含めると広く、上段は火山灰が堆積する平坦面で水利には恵まれないが、段丘面の東端には湧水による湿地性の低地がある。上段をH 1 地形、下段をH 2 地形と区分する。

○狭い段丘面が連続する下久堅・龍江地区（I地形）

H地形のような雛壇状の段丘面ではないが、上段と下段が細長く展開している。下段が広いのは龍江地区で、氾濫原は天竜川治水対策事業で盛土されている。上段をI 1 地形、下段をI 2 地形と区分する。

以上のように、飯田市域において、史跡飯田古墳群を含む古墳が分布する一帯の地形が、このように複雑で、モザイク状に細分される要因は、東西方向から押す力が加わることによって形成されたからである。竜西の上段と下段を分ける段丘崖は断層である。こうした地形の骨格は、当地に人の生活痕跡が認められるようになった3～5万年前には出来上がっていたと考えられる。以後、土石流や河川の浸食などが繰り返されながら、現在の地形が形成されてきたといえる。

一方、細分した地形内においても水利、土壌、気象といった環境は多様で、生活を営むには多様さに適応しながら、有用性を引き出していくことになる。古墳を築造した人々も同様であったと考えられ、地形環境と古墳分布を重ねて考えることも大切といえる。

（2）地形区分と飯田古墳群の分布

史跡飯田古墳群を含めた飯田古墳群は、座光寺単位群・上郷単位群・松尾単位群・竜丘単位群・川路単位群と捉えられ、5つの単位群はA2・B1・C・D・F2地形に分布している。

A2地形には、座光寺単位群と上郷単位群がある。座光寺単位群は北端に、上郷単位群は南端に立地している。両単位群の間には土曾川及び低湿地がある。互いに眺望できるが、中核となる高岡第1号古墳と飯沼天神塚（雲彩寺）古墳の横穴式石室の型式は異なっており、同一地形内にあっても自立的であった可能性が高い。この他、座光寺単位群に帆立貝形古墳の新井原12号古墳、上郷単位群に前方後円墳の溝口の塚古墳と番神塚古墳があるが、煙滅している。ただ、座光寺単位群でA1地形の東端部には、煙滅した前方後円墳の北本城古墳が唯一築造された。

B1地形の北端に松尾単位群がある。姫塚古墳、上溝天神塚古墳、おかん塚古墳、水佐代獅子塚古墳が築造され、松川を挟んで上郷単位群と対峙している。代田獅子塚古墳が築造されたほか、前方後方墳の羽場獅子塚古墳がある。一方、B2地形内には飯田古墳群は築造されなかった。

C地形内には竜丘単位群がある。南端に大塚古墳、丸山古墳、兼清塚古墳が隣接して築造され、地形内を2分する新川の北側には権現堂1号古墳と塚越1号古墳が築造された。氾濫原を持たず水田可耕地が少ないが、5基の前方後円墳が築造されている。

D地形内には竜丘単位群と川路単位群がある。駒沢川と白井川間の段丘面上に竜丘単位群の塚原二子塚古墳、鏡塚古墳、鎧塚古墳、塚原3号古墳が、一段下の段丘面には同単位群の金山二子塚古墳が築造された。白井川と久米川間の段丘面には同単位群の御猿堂古墳と馬背塚古墳が、久米川右岸の段丘端には川路単位群の久保田1号古墳が築造されている。

F2地形では、東端部に松尾単位群の御射山獅子塚古墳、八幡山古墳のほか、大半が煙滅した前方後円墳の茶柄山3号古墳、前方後方墳の代田山狐塚古墳が築造された。また、松川を眼下に望むF2地形の北端部には前方後方墳の笛吹2号古墳と積石塚3基が築造されている。

細分した地形と飯田古墳群の分布をみると、基本的に下段に築造された共通性が指摘できる。上段に築造された古墳も、下段を望む先端部に築造されており、飯田古墳群は地形的には下段で展開したといえる。その一方で、それぞれの単位群では築造数や築造時期等に違いがあり、地形環境との関係も注意していく必要がある。

次に、飯田古墳群以外の古墳分布について簡単に触れておく。

E地形では、尾根部を中心に円墳が数基まとまって築造されている。E2地形内には石原田古墳、高

松3号・4号古墳が築造され、地区内から5領の短甲が、新道平1号古墳からは内行花文鏡が出土している。

F地形では、F2地形端部の山麓部や平坦部には円墳が単独ないし数基のまとまりで点在している。F2地形内の大畑古墳からは盤龍鏡が出土している。

G地形では築造された古墳は少ないが、複数の埋葬施設が構築された石子原古墳や双龍環頭柄頭と内行花文鏡が出土した金堀塚古墳がある。

H地形では、H2地形内で単独ないし複数基のまとまりを持った円墳が築造されるとともに、H1地形内にも少数だが円墳が築造されている。竜東唯一の前方後円墳である郭1号古墳はH2地形内にあり、御猿堂古墳に匹敵する規模の横穴式石室が構築されている。周辺の円墳からは円筒埴輪、金銅装馬具、四神四獣鏡等が出土している。

I地形内では、円墳が単独ないし数基のまとまりで築造されている。I1地形内には内行花文鏡、乳文鏡が出土した宮ノ平2号古墳がある。

A～I地形以外では、下久堅・上久堅・龍江地区の山間地で円墳が築造されている。その中には、周溝から馬埋葬土壌が発見された鬼釜古墳や横穴式石室が遺る塚穴1号・2号古墳がある。

3. 自然災害

史跡飯田古墳群を含む飯田市域の古墳がこれまでに遭遇した自然災害の中で、規模や内容がある程度分かる洪水や地震を通して当地域の自然災害事情を概観し、古墳の被災状況についてみる。

（1）大洪水

1）正徳の未満水 正徳5（1715）年6月発生

梅雨末期、一週間あまり降り続いた集中豪雨によって生じた大水害で、今に語りつがれるほどである。野底川、松川、大島川をはじめ多くの支流が土石流を引き起こしたことや天竜川が氾濫した記録が多く残されている。史跡恒川官衙遺跡の正倉院内の耕作土下にみられる砂礫層は、この時のものである。

2）慶応元年の洪水 慶応元（1865）年5月発生

梅雨前線が原因とされる集中豪雨が、4日間ほど降り続いたことによる水害で、未満水以来の大満水との記録がある。川路地区の平坦部は大半が水中に没し、民家の2階から筏を出したという。また、高森町山吹では天竜川の川除けの決壊、支流の境の沢、田沢川、ごまめ沢等で土石流が発生したという。

3）昭和36年6月梅雨前線豪雨 昭和36（1961）年6月発生

梅雨末期、一週間余降り続いた集中豪雨によって引き起こされた大災害で、「三六災」と呼ばれている。天竜川の堤防が各所で決壊して氾濫原が水没、野底川、王竜寺川、大島川や小河川が土石流を発生、大鹿村大西山に代表される大小の山崩れが各所で発生等、飯田下伊那地域全体で大きな被害があった。

当地域の洪水発生頻度は、『下伊那誌 気象編』によれば、1573年から1961年までの389年間に不確定を含めて183回の洪水があり、平均2.1年に1回の割合で起きている。規模別でみると大洪水52回、中小

洪水131回となり、大洪水は8年に1回の割合で起きていることになるという。さらに、特大洪水は上記の3件の他に寛政元年酉満水・文化元年子満水・文政11年子満水・明治元年辰満水が挙げられている。当地域は梅雨前線や台風が原因で、土石流を伴う洪水が多い地といえるが、正徳の未満水や昭和36年の三六災のような特大洪水は何十年に1度もしくは百年に1度といった頻度といわれている。

そうした中で、高岡第1号古墳周辺を土石流が襲った正徳の未満水は大量の砂礫を堆積させたが、一帯の古墳そのものを破壊することはなかった。一方、この満水時に上郷地区の中井古墳は封土が洗い流されて石室が露出したという。その後三六災の際に埋没し、石室内に入ることができなくなった。古墳が破壊された事例では、旧飯田工業高等学校建設時に調査された新井原15号・16号・17号古墳がある。時期の特定はできないが南大島川の浸食によって壊されたことは確実で、河川に近接して築造された古墳が罹災した事例である。この他には、やはり時期の特定はできないが古墳時代後期の集落の一部が、天竜川の浸食によって流失した事例が細新遺跡で確認されている。とはいえ、総体的に古墳は洪水被害を受けないような地に築造されたといえる。

(2) 地震

1) 遠江地震 和銅8(715)年5月25日発生

遠江・三河を揺らした地震。飯田市南信濃日影山の大崩壊によって遠山川がせき止められて天然ダム湖ができ、流域の樹木が埋没したことが、埋没木の年輪年代測定から判明している。

2) 天正地震 天正13(1586)年11月29日発生

中部地方を激しく揺らしたマグニチュード7.8~8.2とされる内陸地震。平谷村から流れ出す上村川流域での山体崩壊と天然ダム湖の形成、阿智村横川湯が洞と旧清内路村桑畑沢で埋没木を生じさせた山地崩壊が確認されている。天竜川流域での被害は不明。

3) 宝永地震 宝永4(1707)年10月4日発生

『飯田世代記』によると、東海道沖、南海道沖を震源とするマグニチュード8.4の地震。飯田町で潰家50軒、半潰100軒、土蔵潰20か所、同半潰68か所との記録や、市田村の庄屋の記録には長さ7間に渡る家下の道の崩壊、竜東の山々のなぎが一度に崩れ、土煙が四方に立つのを見たとある(下伊那教育会1984)。

4) 遠山地震 享保3(1718)年7月26日発生

長野県南部を震源とするマグニチュード6.4の地震。飯田市南信濃遠山の出山の形成、満島番所の崩壊、飯田では潰家350軒余、半潰580軒余、長久寺の唐門が倒壊、死者12人の被害があったという。他には天龍村、阿南町、下條村で斜面や田畑が崩壊・崩落したという。

5) 安政地震 嘉永7(1854)年11月4日発生

東海沖を震源とするマグニチュード8.4の地震。飯田町だけで被損家屋が589軒、愛宕の稲荷社が谷底に転落破損したという。

以上のように、当地域で大きな被害が生じた地震には、海溝型地震と内陸型地震があるものの、古墳が破壊されるような被害は確認されていない。しかし、昨今起きる可能性が高いとされる東南海地震では震度6強が想定され、伊那谷断層帯が動く直下型地震ではマグニチュード7.5以上の地震規模が想定されており、上段と下段を分ける段丘崖の崩壊が、上段先端部に立地する古墳や下段に築造されている古墳を襲う可能性も考えられる。

4. 動植物

飯田市は、天竜川沿いの標高400mから標高3013mの赤石山脈の聖岳に至るまで標高差が大きいことから、動植物の分布も変化に富んでいる。これについては詳述しないが、史跡飯田古墳群の保存活用を図る上で関わると思われる動植物について触れておく。

墳丘上には築造時には存在しなかったが、時間の経過とともに繁茂した樹木が高岡第1号古墳のように「高岡の森」と呼ばれて古墳と一体化した景観となっていたり、水佐代獅子塚古墳上のエドヒガン（おたちふの桜）のように樹木自体が地域のシンボルとなっていたりする。また、鏡塚古墳のように農地としてカキなどの栽培に利用されていたりする場合もある。しかし、竹林の繁茂、樹木の巨木化、枯死による倒伏、果樹の抜根などにより、墳丘の破壊や景観の悪化、周辺への影響が懸念される場合も多く、史跡の保護と樹木のもつ役割との調和、あるいは伐採後の処置等が課題になってくることが考えられる。

動物では墳丘に巣穴を掘る小動物が存在する。近年、こうした小動物が人里で生育していることが多くなっており、飯沼天神塚（雲彩寺）古墳では複数の巣穴が確認できる。小穴であっても雨水の流入口となり、時間の経過とともに古墳へ与える影響は少なくないと思われる。

史跡飯田古墳群のうち御射山獅子塚古墳以外は下段に立地していて、ほとんどが耕作地や住宅地になっている。上段と下段を分ける段丘崖はスギ・ヒノキの植栽林、コナラ・アカマツの二次林、モウソウチク・マダケ・ハチクの竹林、常緑広葉樹が生育する緑地景観となっているが、放置によって樹林や竹林が藪化している一方、法面工事で緑地が減少したりしている。今後、好ましい景観の維持と防災対策の調和が課題になる。また、馬背塚古墳は、環境省選定の「ふるさといきものの里」100選に選定された飯田市ギフチョウ公園区域内にある。ギフチョウは飯田市天然記念物に指定されており、古墳西側の丘陵地に食草とするヒメカンアオイやウスバサイシンの生育していることから、史跡との一体的な活用を考えていくことも必要である。



写真5 市指定天然記念物「水佐代獅子塚のエドヒガン」（おたちふの桜）

2 節 歴史的環境

1. 旧石器時代～縄文時代の様相

飯田市における旧石器時代の遺跡として、山本地区の石子原遺跡、竹佐中原遺跡が知られており、3万年以前に遡る可能性がある石器群が出土している。また、各所に、後期旧石器時代の遺物出土があり、遊動生活の痕跡を留めている。

縄文時代に入ると、河川に面した低位段丘上を中心に草創期の遺物分布が認められるほか、草創期から前期にかけての遺跡は山麓周辺に集中し、時期が下るとともに台地先端へと分布が広がる。中期には、山麓から低位段丘まで爆発的に遺跡数が増加する。しかし、後期から晩期になると遺跡数は極端に減少し、天竜川の本支流に面した低地を中心に立地が確認される。

2. 弥生時代の様相（図11）

稲作の導入と定着を示す弥生時代前期の遺跡は極めて少なく、座光寺地区の新井原・石行遺跡と上郷地区の矢崎遺跡等が知られている。集落は低位段丘上に分布するとみられるが、詳細は不明である。

中期前半になると明瞭な集落が確認され、天竜川右岸では松尾地区の寺所遺跡や川路地区の井戸下遺跡、左岸では下伊那郡喬木村の阿島遺跡等があり、いずれも天竜川の氾濫原に面した低位段丘上に立地する。水利に恵まれた氾濫原の水田利用が背景にあると推定されるが、現在までのところ明確な水田遺構は確認されていない。中期後半になると、座光寺地区の恒川遺跡群や川路地区の井戸下遺跡、天竜川の支流である南大島川を挟んで座光寺地区の対岸に位置する下伊那郡高森町の北原遺跡、座光寺地区との境となる土曾川を挟んで対岸に位置する上郷地区の丹保遺跡や藪越遺跡等で集落が確認されている。

後期に入ると、低位段丘を中心としつつ、加えてより上位の段丘上にも集落が展開する。小規模な谷地水田と高燥な台地上での畑作との複合的な生産基盤による集落が存在し、後期の標式遺跡である座光寺地区の座光寺原遺跡・座光寺中島遺跡が知られている。座光寺原・中島式土器と呼ばれる後期を代表とする土器群は斉一性が高いことから、それらが分布する飯田下伊那地域から上伊那地域南部一帯を座光寺原・中島式土器文化圏とし、諏訪湖を中心とする橋原式土器文化圏、北信の箱清水式土器文化圏と対比される。また、中島式土器は、隣接する岐阜県中津川市や静岡県浜松市の遺跡からも出土しており、沿岸部や内陸部との交流も想定される。該期の集落立地としては、座光寺地区の恒川遺跡群のように低位段丘に立地する集落は、弥生時代中期から平安時代に至るまで拠点集落として継続するが、より上位の段丘上に分布する集落は、上郷地区の高松原遺跡や伊賀良地区の殿原遺跡等のように短期間で廃絶する傾向が認められる。このことは、上位の段丘上へと集落が広がったものの、生産性の問題等により長期間にわたる集落の存続が困難であったことが考えられる。

弥生時代の墓制として、溝で区画された周溝墓の存在が明確になるのは後期以降である。円形周溝墓もわずかに存在するが、主体は方形周溝墓である。伊賀良地区の酒屋前遺跡（旧滝沢井尻遺跡）の方形周溝墓からは2本の鉄剣が出土している。方形周溝墓の多くは埋葬施設が削平されており、出土遺物も多くはないが、周溝内から出土する土器棺等の時期からみて、集落域に近い場所に墓域が形成された姿がある。

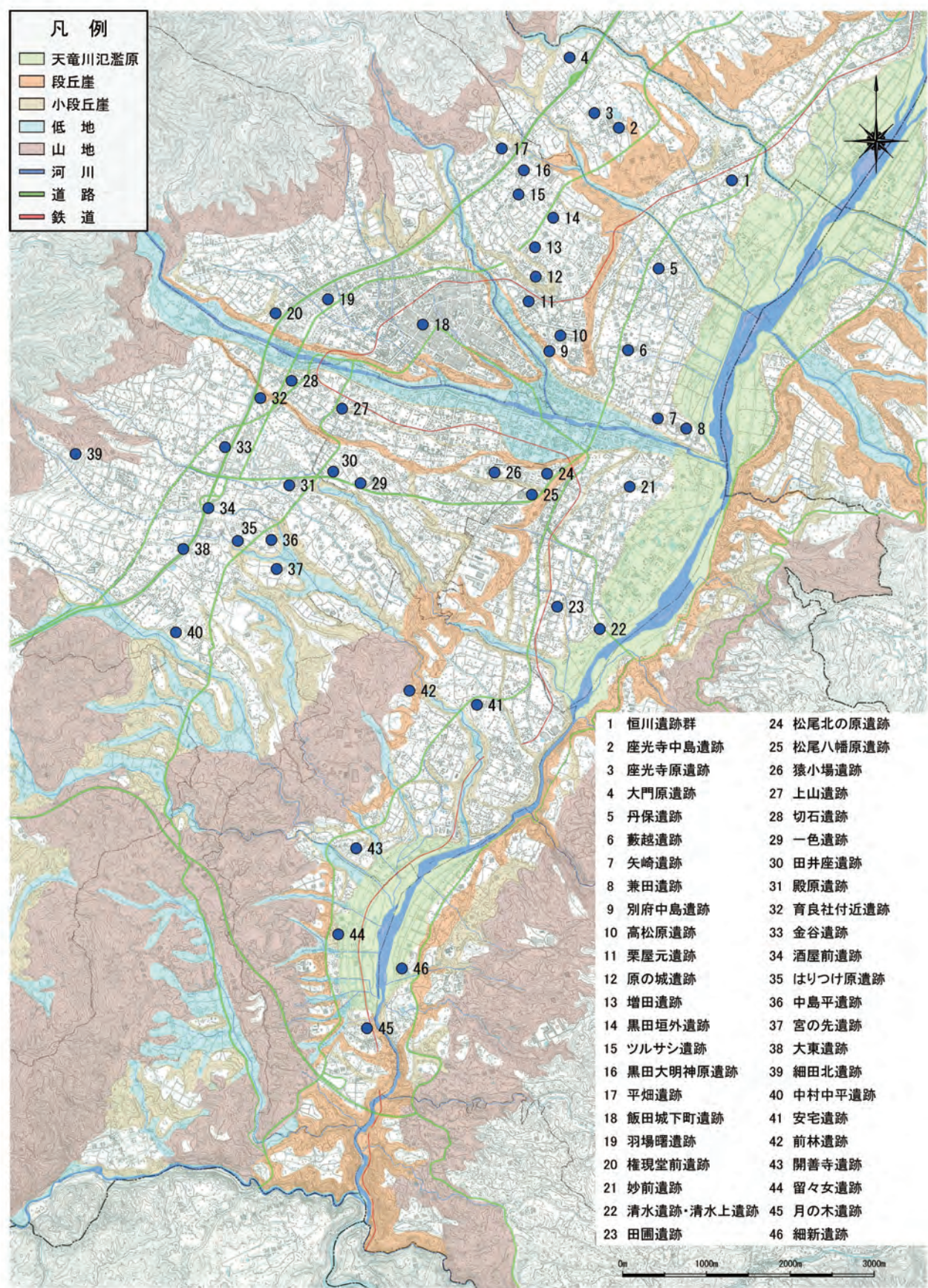


図11 飯田市域の弥生時代後期の主な遺跡分布図

3. 古墳時代の様相

(1) 古墳の動向 (図12)

1) 前期 (4世紀)

該期には、弥生時代の方形周溝墓の系譜に繋がる方形の墳墓が造られたと考える。弥生時代後期末から古墳時代前期とみられる竜丘地区の蒜田遺跡、松尾地区の松尾城遺跡では、墳丘の表面に葺石状に石を貼りつけた墳墓が確認されており、新たな古墳文化への移行を想定させる。さらに、前期後半から中期にかけては、松尾地区の松尾八幡原遺跡・田圃遺跡、竜丘地区の上の坊遺跡等では葺石を有する小型で低い墳丘を有する古墳（小型低方墳）が確認されている。

前期中葉（4世紀中葉）には前方後方墳が築造される。これまでに、松尾地区の代田山狐塚古墳と羽場獅子塚古墳、伊賀良地区の笛吹2号古墳の3基が確認されている。代田山狐塚古墳と羽場獅子塚古墳は、天竜川の氾濫原に面した低位段丘を見下ろす段丘縁辺部に、笛吹2号古墳は天竜川の支流である松川を見下ろす段丘縁辺部に立地する。3基は所在する地区が異なるが、いずれも天竜川及び松川と毛賀沢川に区切られた段丘上にあり、地形的には連続する。

長野県内における初現期の前方後方墳として松本市の弘法山古墳がある。出土した土器群は東海地方の影響によるものであり、3世紀に遡る時期が示されている。飯田下伊那地域では、下伊那郡豊丘村の田村原遺跡で確認された前方後方形周溝墓の周溝内から東海系の広口壺が出土している。東海地方からの影響により4世紀に築造されたと考えられ、方形周溝墓から古墳



写真6 笛吹2号古墳（調査時）



写真7 羽場獅子塚古墳（調査時）

への移行期のものと捉えられる。このように、当地域における前方後方墳の成立は、弥生時代以来の関

係性もあり東海地方沿岸部から影響を受けたもので、松尾地区にある前方後方墳の代田山狐塚古墳は、その墳丘形状からも東海地方との関係が想定されている。

一方、笛吹2号古墳と羽場獅子塚古墳は、発掘調査の結果によると、築造時期が相前後するものの、その特徴は大きく異なる。前者は葺石を有さず、くびれ部を中心に多量の土器が出土するのに対し、後者は墳丘全面に大小の石による葺石が施されるが、埴輪はなく土器もほとんど伴わない。

これまで、当地域の前方後方墳の成立には、弥生時代以来の東海地方沿岸部からの影響を主に想定してきたが、小礫を多用する羽場獅子塚古墳の葺石のあり方は、東海地方内陸部の古墳に類似したものがあり、内陸部との関係も視野に入れる必要がある。このような多方面からの影響による古墳文化の受容は、中期以降のあり方とも類似する。

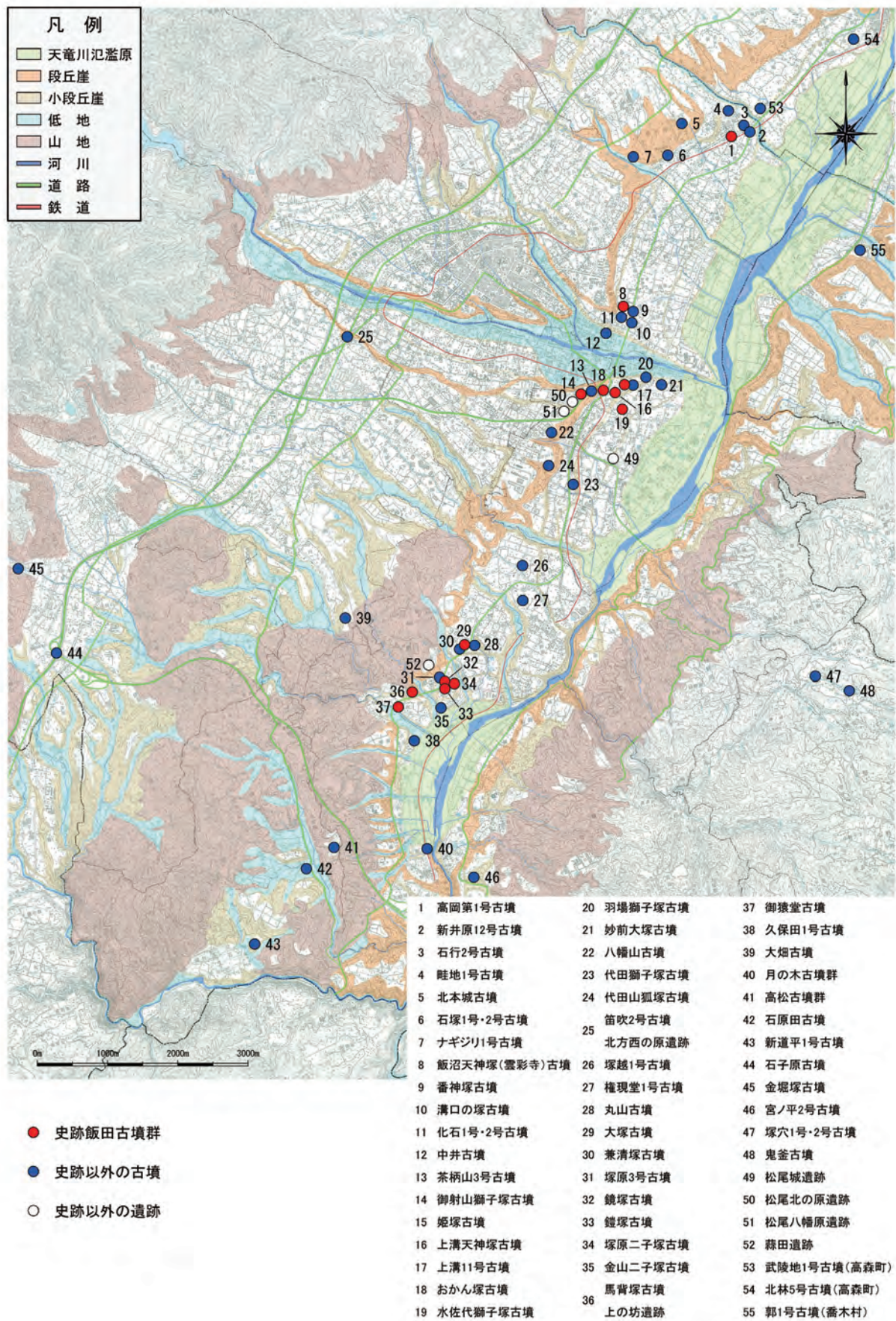


図12 飯田市域及び周辺の主な古墳分布図

2) 中期 (5世紀)

飯田下伊那地域では前方後円墳から連続する首長墓クラスの古墳は確認されていない。前方後円墳の築造が盛行するのは中期中葉 (5世紀中葉) 以降のことで、前方後円墳の築造時期からは一定の空白期間があり、首長墓としては断絶がみられる。

該期は、高句麗の南下政策に伴う朝鮮 (韓) 半島南部の軍事的緊張関係による東北アジアの緊迫した国際情勢を背景に、ヤマト王権により軍事力強化、さらには東国経営のための体制強化が図られた。

飯田市域では中葉に遡る馬具を伴う馬の埋葬事例が複数あることから、全国的にも早い段階に馬匹文化がもたらされ、生産地としての役割を担っていたと想定される。先述の状況からは、日本列島の西と東とを繋ぐ内陸交通の整備のため、馬匹生産と管理を担う拠点の一つとして当地域が選ばれたと考えられる。突如ともいえる前方後円墳の出現は、馬を介してヤマト王権と密接な関係が結ばれたことによる。

前方後円墳・帆立貝形古墳を核とする飯田古墳群は、5世紀中葉から6世紀末にかけて連続して築造されるが、古墳群は大きく5つの単位群 (座光寺・上郷・松尾・竜丘・川路) に分かれる。前方後円墳築造が途切れることなく、最終段階まで連続するという点では竜丘単位群の優位性が認められる。一方、中期段階の馬の埋葬が座光寺・上郷・松尾地区に所在する複数の遺跡で確認されていること、飯田古墳群では最大級となる70mを超える前方後円墳が、座光寺 (高岡第1号古墳)、上郷 (飯沼天神塚 (雲彩寺) 古墳)、竜丘 (塚原二子塚古墳) の各単位群にあることなどから、当初から複数の馬匹生産集団が存在し、ヤマト王権と繋がりをもっていたと想定される。このことは、飯田古墳群の特徴である多様性として表れている。飯田古墳群のあり方は、地域全体を統括するような集団が存在するものの、独自性をもつ複数の集団の連合体的な社会構造であったことを物語るともいえる。

馬匹文化のいち早い導入には、渡来人等の移住者の存在が想定されるが、集落の中では明確な痕跡は認められない。しかし、近年、当地域にはないとされていた積石塚が、伊賀良地区の北方西の原遺跡で3基確認された。中期後半の積石塚で、副葬品には渡来系の要素は認められない。同じ台地上には同時期に造られた円墳や土壙墓があるが、これらとはやや離れた場所を墓域としていることから、両者の築造主体は近い関係にありながらも出自の異なる集団であると考えられる。



写真8 北方西の原遺跡の積石塚

積石塚は、飯田古墳群の中核部からは離れた上段の段丘上に立地しており、現時点では馬匹生産を担う集団との直接的関係は認められない。

さらに、該期の特徴として甲冑を副葬品とする円墳の存在がある。石行2号古墳 (座光寺地区)、妙前大塚古墳 (松尾地区)、月の木1号古墳 (川路地区)、三穂地区の古墳等がある。

3) 後期から終末期 (6世紀～7世紀)

後期 (6世紀) の前方後円墳に高岡第1号古墳、飯沼天神塚 (雲彩寺) 古墳、御猿堂古墳がある。これらは異なる単位群に属するが、墳丘形状が後円部に比べて前方部が細長いという点が類似する。

一方、飯田古墳群の多様性は埴輪等でも認められるが、後期初頭 (6世紀初頭) に前方後円墳の埋葬施設として導入された横穴式石室に顕著に表れている。座光寺単位群では、北本城古墳と高岡第1号古

墳、さらに円墳の畦地1号古墳で朝鮮（韓）半島に起源をもつ竪穴系横口式石室の系譜に繋がる横穴式石室が採用される。これに対し、他の単位群でもほぼ相前後する時期に横穴式石室が導入されるが、飯沼天神塚（雲彩寺）古墳では群馬県西部に所在する古墳の横穴式石室に類似するもの、上溝天神塚古墳や御猿堂古墳では無袖の横穴式石室が採用されるなど、系譜の異なる複数形態の石室の存在が確認されており、導入経路等については単位群ごとの独自性が認められる。

また、中葉から後半（6世紀中葉から後半）にかけて、無袖の横穴式石室は前方後円墳だけではなく円墳の埋葬施設としても広く採用され、斉一化が進む。天竜川左岸（竜東）に所在する下伊那郡喬木村の郭1号古墳も無袖の横穴式石室を有する前方後円墳である。本古墳の出土遺物は不明であるが、石室形態からは飯田古墳群との関係が想定される。さらに、後半には、竜丘単位群と松尾単位群の前方後円墳に畿内系両袖式横穴式石室が採用される。これと連動するように前方後円墳築造が松尾と竜丘単位群に集約される。このことから、ヤマト王権の地方経営の強化に伴い、当地域の社会構造に変化が生じたものと考えられる。

飯田古墳群は最終的に竜丘単位群の馬背塚古墳をもって終息する。本古墳は巨石を用いた無袖と畿内系両袖式という異なる2つの横穴式石室を有する。石室構造から後期末（6世紀末）の築造と考えられる古墳で、畿内における前方後円墳の終息とも連動している。

後期における円墳の分布は、前方後円墳にも匹敵する大型の横穴式石室を有する座光寺地区の石塚1号・2号古墳のように、前方後円墳の分布域と近いものがある一方、これまで古墳が存在しなかった山間部や支流沿いの谷筋等にも拡大する。円墳を中心とする群構成は小規模で10基に満たない場合が多く、いわゆる密集型群集墳が存在しないことも当地域の特徴である。また、飯田古墳群とは離れた上久堅地区の鬼釜古墳や下伊那郡高森町の北林5号古墳は周溝内に馬の埋葬土壙を有する円墳で、馬匹生産の拡大に伴うものと考えられる。さらに、横穴式石室の構造でみると、無袖の横穴式石室を採用する円墳が多い中で新たな展開がみられる。例えば、松尾地区の上溝11号古墳は当地域で変化した両袖式の横穴式石室であり、飯田市域外では下伊那郡阿南町大畑古墳、種田塚古墳で、西三河の影響を受けた横穴式石室が採用されている。

円墳の築造は前方後円墳の終息後も継続するが、7世紀初頭には新たな築造は終息するとみられる。ただし、追葬ないし祭祀行為は律令時代に入っても継続することが座光寺地区のナギジリ1号古墳等で確認できる。

これまでのところ、飯田市域では、終末期段階の首長墓系列に繋がるような大型方墳等は確認されていない。一方、竜丘地区では、御猿堂古墳の北東側に白鳳期とされる軒丸瓦等が出土した上川路廃寺があり、馬背塚古墳一帯の上の坊遺跡からも布目瓦が出土している。このように、前方後円墳が築造された地区も含めた各所で、布目瓦・仏教関連遺物等、寺院の存在を想定させる遺物が出土する。未調査であり、伽藍配置等は確認できていないが、前方後円墳に替わるものとして新たに寺院建立が進められたことが想定できる。

該期は、前方後円墳の終息や集落の減少という点で、一見地域社会が衰退していくかのような様相を示す。しかし、前述の状況や下伊那郡高森町の武陵地1号古墳や座光寺地区の恒川遺跡群での「富本銭」の出土等から、律令時代への新たな転換期として位置付けることが可能である。

（2）集落の動向（図13・14）

弥生時代後期に増加した集落は、古墳時代前期の3世紀末から4世紀にかけて減少する。これに対し、古墳時代中期以降、5世紀後半から6世紀前半にかけて再び増加し、7世紀には再び減少傾向を示すことから、古墳築造の動向との連動が指摘されている（山下 2003・2004）。また、個々の集落の動向をみていくと、弥生時代からの連続が認められる集落と、一定期間に限定される集落とが存在する。さらに、古墳時代の集落は、「天竜川の氾濫原や段丘直下の比較的広範な水田可耕地を控えた集落は一定の規模を保持し、その農業生産高も集落が生計を営むに足りており、中心域の移動はあっても継続性が認められる。一方、高位の段丘上にあり、小規模谷地水田と畑作によった集落は、その規模も小さく、生産高は限定的であり、存続期間も短期間のものが多い傾向にある。」とされる（小林 2011）。

1）前期（4世紀）

該期の集落遺跡の発掘調査事例は少ない。弥生時代から連続する遺跡として、座光寺地区の恒川遺跡群、上郷地区の丹保遺跡、松尾地区の清水遺跡、川路地区の井戸下遺跡や月の木遺跡等がある。天竜川や支流の氾濫原を控えた比較的安定した生産基盤をもつ地域に多く分布しており、集落域の中心は水田可耕地となる氾濫原や湿地に面した下段の低位段丘が主体であると考えられる。しかし、前方後方墳である笛吹2号古墳の立地からは、上段の山麓扇状地での集落展開も注意する必要がある。

2）中期（5世紀）

前期から連続する恒川遺跡群のほか、上郷地区の矢崎遺跡、松尾地区の田圃遺跡、竜丘地区の前の原遺跡、ガンドウ洞遺跡、龍江地区の細新遺跡等があり、中期後半から後期（5世紀後半～6世紀）まで連続した集落展開がみられる。これらは飯田古墳群が主に分布する低位段丘面に立地することから、前述のように、古墳築造との連動がうかがえる。

前方後円墳の造墓集団の集落域は必ずしも特定されていないが、古墳の分布からみて、単位群ごとに該当する集落があると考えられる。段丘端部に立地する古墳は、下からの視認性を意識したものと考えられ、稲作を生産基盤とする弥生時代以降の集落展開からみても、氾濫原や段丘崖下の湧水等水利に恵まれた低位段丘上に継続的に展開する集落が中心となることが想定される。一方、広い平坦部を有する高燥な上位の段丘上にも同時期の集落展開がみられることから、上位の段丘面に広がる集落との関係も考慮する必要がある。



写真9 細新遺跡の古墳時代集落

中期後半の集落における大きな変化としてカマドや須恵器の導入がある。初期のカマド導入事例として龍江地区の龍江大平遺跡がある。炉とカマドの両方をもつ竪穴建物が確認されており、過渡期の様相を示す。また、鼎地区の切石遺跡（旧山岸・天伯遺跡）では、当地域でもいち早くカマドが集落全体で導入されている。これら2つの遺跡は、前者は天竜川左岸に、後者は天竜川支流の松川の氾濫原に面した低位段丘上に位置しており、いずれも飯田古墳群の分布域からは離れた場所にある。

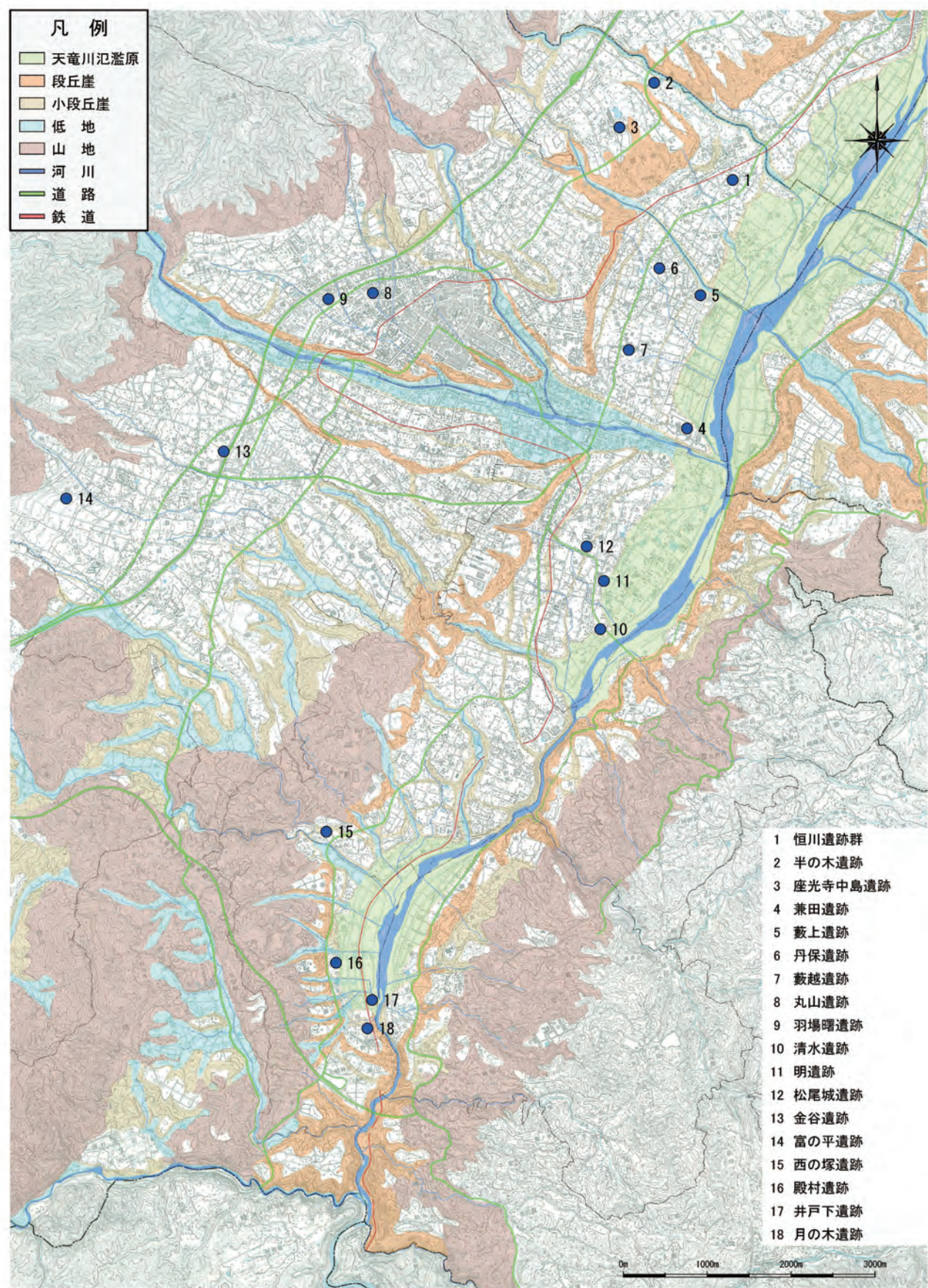


図13 飯田市域の古墳時代前期～中期前半の主な遺跡分布図

3) 後期から終末期（6世紀～7世紀）

後期になると中小規模の円墳が増加するが、前方後円墳の分布域とは異なる地域に分布するものも多い。天竜川左岸も含めて、天竜川の支流に面した傾斜地や山間部に立地する古墳の造墓集団は、中小河川流域の低地を生産基盤とする集落が母体となっていると考える。

該期の集落では新たな展開がみられる。前半に途絶する集落がある反面、長期間継続する集落も出現する。継続的な集落として、座光寺地区の恒川遺跡群、上郷地区の堂垣外遺跡、松尾地区の妙前遺跡、竜丘地区の開善寺境内遺跡、川路地区の留々女遺跡や辻前遺跡、天竜川左岸の龍江地区の細新遺跡があげられる。これらのうち、座光寺・松尾・竜丘地区の動きは、先述の前方後円墳の動向とも関わるものと考えられる。また、川路や龍江地区の動きは、河川を挟んだ対岸の一大勢力である竜丘地区との関係として捉えられる。

さらに、山間部に位置する上久堅地区の北田遺跡でも後期の集落が確認されている。当地区の鬼釜古墳では、近年の発掘調査で周溝から馬を埋葬した土壌が検出されており、山間部への集落拡大の背景に馬匹生産の拡大が想定できる。

7世紀以降、集落の数は前段階に比べて減少する傾向にあるが、先述した後期になって長期継続する集落（開善寺境内遺跡、辻前遺跡、北田遺跡等）には、居宅的性格が想定される掘立柱建物群が存在するものがある。このことから、前方後円墳終息後も地域社会の秩序は連綿と維持されているとみられる。一方、小規模な群集墳の存在は、集落の集散や規模の変化を反映している。

（3）生産遺跡

古墳時代に新たな産業として導入された馬匹生産であるが、馬匹生産地（＝牧）の所在地については特定されていない。これまでのところ、比高差のある段丘崖と天竜川の支流によって区切られた特徴的な地形から、上段の段丘上が放牧地となったと考えている。同様の地形が連続する天竜川右岸の状況や、先述した各地区での馬匹文化の受容等から、複数の牧の存在が想定される。ちなみに、牧関連施設（馬寄せ施設）として想定されているものに、松尾地区の松尾八幡原遺跡で確認された内径47mの円形に巡る溝がある（小林 2001）。本遺跡は上位の段丘面に位置しており、小谷を挟んだ北側の段丘上には10基の馬の埋葬土壌を伴う茶柄山古墳群が立地する。

埴輪や須恵器生産も新たな産業といえるが、現時点では確実な生産遺跡（窯跡）は確認できていない。

埴輪については、中期末には塚原二子塚古墳等の一部の古墳で窖窯焼成によると考えられる無黒斑の埴輪が確認できるが、窯焼成の埴輪が普及するのは後期に入ってからと考える。また、川路地区の殿村遺跡では竪穴遺構から船形埴輪・家形埴輪・朝顔形埴輪等が出土している。古墳に直接伴わない形で埴輪が出土することから祭祀的な性格も想定されるが、埴輪とともに炭化物が多く出土していることから生産遺跡としての可能性も想定できる。これらの埴輪の供給先として、本遺跡から最短距離にある前方後円墳の久保田1号古墳（川路単位群）が想定されるが、飯田市域の古墳出土埴輪の胎土分析との比較では、久保田1号古墳出土埴輪とは異なり、塚原二子塚古墳出土埴輪との近似性が認められる（飯田市教育委員会 2003）。

須恵器については、集落から出土する製品の中に地元産が想定されるものがあり、須恵器の地方生産の開始時期を考える上で注意が必要である。

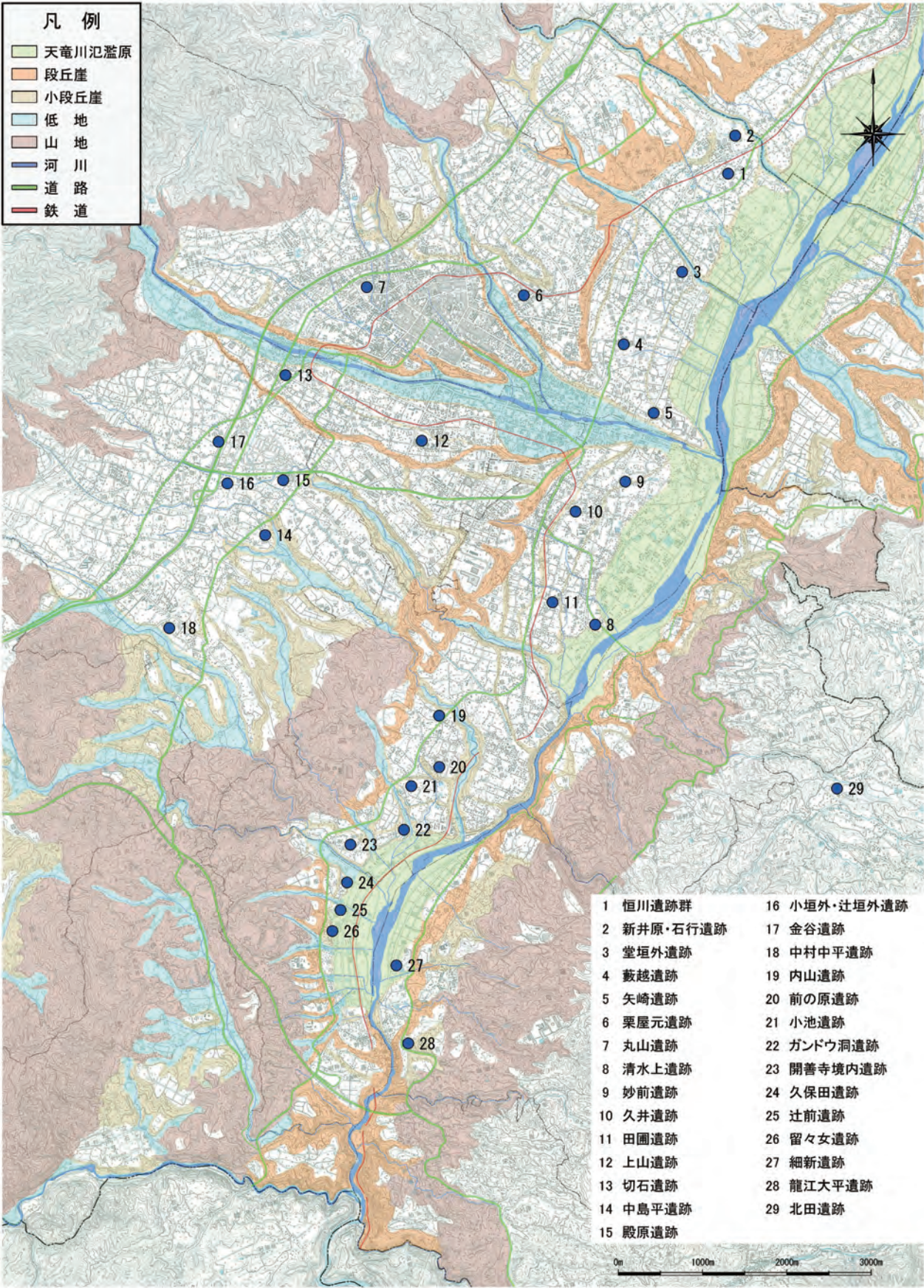


図14 飯田市域の古墳時代中期後半～後期の主な遺跡分布図

（４）飯田古墳群からみた周辺地域

１）長野県内の様相

長野県全体の古墳の数は3500基以上（長野県立歴史館ホームページ）で、このうち長野市域では約870基の古墳が確認されている（長野市文化財データベース）。飯田市域は約520基で必ずしも古墳の数は多くはない。一方、長野県内の前方後円墳は、北信21基、東信1基、南信26基の計48基（西山 2003、風間 2011）が確認されている。飯田古墳群は22基の前方後円墳と5基の帆立貝形古墳で構成されており、県内の約半数を占めている。これを市域の古墳総数との比率でみると、前方後円墳の数は古墳総数の約4％、帆立貝形古墳を加えると5％という高い割合を示す。

長野県は、前方後円墳の分布において北信の善光寺平と南信の伊那谷とは常に対比される関係にある。北信では、長野市や千曲市を中心に前期から中期前半（4世紀～5世紀前半）までの間、千曲川右岸では、前期（4世紀）に遡る県内最大規模を有する森將軍塚古墳を端緒として、有明山將軍塚古墳→倉科將軍塚古墳→土口將軍塚古墳、左岸では川柳將軍塚古墳→中郷神社古墳と中期前半（5世紀前半）まで連続して首長墓が築造されるが、以後前方後円墳の築造が衰退する（風間 2012）。一方、中期中葉（5世紀中葉）以降、飯田古墳群が存在する南信では前方後円墳築造が盛行する。

飯田市域以外の南信の状況をみると、天竜川左岸に位置する伊那市老松場1号墳は、最近の測量調査で前方後円墳と確認された。現時点では時期等の詳細は不明であるが、天竜川とその支流の三峰川の合流点を見下ろす段丘端部に立地することから、比較的古い様相を示すことが考えられる。

また、諏訪郡下諏訪町、上伊那郡箕輪町、下伊那郡喬木村にそれぞれ1基の前方後円墳が存在する。下諏訪町青塚古墳及び喬木村郭1号古墳は横穴式石室の構造から、箕輪町松島王墓古墳は埴輪から後期（6世紀）に位置付けられる。飯田市からの距離は青塚古墳まで約65km、松島王墓古墳まで約45kmあり、距離的には離れている。一方、無袖の横穴式石室を有する郭1号古墳は、天竜川を挟んで対岸にある飯田古墳群の座光寺単位群とは指呼の間にある。

２）周辺地域の様相

① 前方後円墳出現の動向から

前述のような、前期から中期にかけて前方後円墳が盛行する地域と、前期には前方後円墳が存在しないものの中期になると盛行する地域が存在することは、長野県以外でも確認されている。このことは、中期における古墳の動向が日本全体に及ぶ大きな画期として捉えられることを示している。

例として、山梨県の笛吹川流域、南関東の神奈川県中部の相模川流域、東京都と神奈川県境の多摩川下流域等があげられる。山梨県の古墳文化は富士西麓の富士川を北上して流入したとされる。盆地南東部では前方後円墳の小平沢古墳に続いて、前方後円墳の甲斐銚子塚古墳や大型円墳の丸山塚古墳といった首長墓の築造が前期から中期前半（4世紀～5世紀前半）まで連続し、中期後半には盆地南部の中央市等で前方後円墳や帆立貝形古墳が築造されるが、大型古墳の築造は途絶える。また、神奈川県相模川中流域にある秋葉山古墳群は、前期（3世紀後半）に遡る前方後円墳である秋葉山3号墳を端緒として前方後円墳や前方後方墳が築造されるが、中期になると大型古墳の築造は終息する。さらに、多摩川流域も同様で、下流域では北岸に100m台の宝来山古墳や亀甲山古墳、南岸に90m前後の白山古墳や観音松古墳等の前方後円墳が築造されるが、中期後半以降は前方後円墳も小型化していく。

一方、中期後半（5世紀後半）に出現し、後期（6世紀）まで前方後円墳築造が盛行する地域として知られているのが、埼玉県北部の行田市に所在する埼玉古墳群である。稲荷山古墳を筆頭に、100mを越える前方後円墳や円墳が連続して築造されており、辛亥銘鉄剣や馬冑等の出土からヤマト王権との強い関係性がうかがえる。

前述のような駿河湾沿岸部から河川交通によって古墳文化が流入した山梨県や東京湾沿岸の東京都、相模湾沿岸の神奈川県は、畿内から東方へ向う主要なルートが、原東海道から後の東山道に交代した可能性が考えられ、「これによって畿内との関係が希薄になったもの」（土生田 2011）とされ、全国的にも中期後半から後期前半（5世紀後半から6世紀前半）の時期に首長墓築造地が移動するという状況が認められることから、その要因の一つに河川交通から陸上交通（内陸交通）への変化があると指摘されている（土生田 2006）。また、「古墳が中小河川の比較的奥まった立地から、より明確な水上と陸上の境界に立地するようになる」ことから、前期以来の河川を含めた水上交通に新たに陸上交通が加わり、「中期における陸上交通の革命的变化」が生じたためとの指摘もある（田中 2012）。

② 西の地域との関係（陸上交通と河川交通）

飯田古墳群出現の背景には、馬による陸上（内陸）交通の発展があると考えられるが、飯田市域から西に至る経路上にある地域では、陸上交通と合わせて河川交通の利用が想定されている（名古屋市教育委員会 2015）。今後、飯田市域周辺から西や東へ至る経路を考えるために、周辺諸地域の動向について触れる。

岐阜県以西の地域では、前方後方墳から前方後円墳へと連続して大型古墳が築造される。その中で、飯田市域の前期古墳の動向でも述べたが、市域に所在する前方後方墳（羽場獅子塚古墳）と共通するものがある。それは、墳丘全面を大小の礫で覆うような葺石を有する前方後円墳や前方後方墳の存在で、岐阜県から愛知県にかけての木曽川や庄内川流域、さらには京都府向日市周辺にも、飯田市域の前期古墳との繋がりが想定される古墳が存在する（飯田市教育委員会 2017）。

さらに前方後円墳の動向をみると、岐阜県では西部の大垣市周辺（揖斐川流域）で、前方後方墳から連続する形で80～100mの矢道長塚古墳や昼飯大塚古墳、遊塚古墳等の大型前方後円墳が連続して築造される。中期になると規模を縮小して、岐阜市の長良川流域等で前方後円墳が築造されるほか、円墳や帆立貝形古墳等の墳形の異なる古墳で構成される古墳群が出現する。揖斐郡大野町の野古墳群はその代表的なものである。木曽川流域の可児市では前期に前方後方墳（西寺山古墳）の築造が前方後円墳（野中古墳等）に先行する。中期の大型古墳は認められないが、終末期（7世紀）になると、前方後円墳の分布域とは異なる地域に大型方墳が築かれる。一辺約30mの可児市次郎兵衛塚1号墳や官衙（弥勒寺官衙遺跡）との関係がある一辺20m超の関市池尻大塚古墳等がある。

また、愛知県では内陸部の木曽川・五条川流域の犬山市から各務原市周辺で、前期（3世紀中葉～4世紀）には前方後方墳の東之宮古墳、100mを超える前方後円墳である青塚古墳、坊の塚古墳等が築造される。また、庄内川流域では前方後方墳として春日井市の高御堂古墳が築造されるほか、青塚古墳と相前後する時期のものとして、名古屋市志段味古墳群の白鳥塚古墳（前方後円墳）がある。志段味古墳群は前期から終末期（4世紀前半～7世紀）までの長期にわたる古墳群で、前期（4世紀前半～中頃）には前方後円墳と円墳が築造される。前期末に途絶するが、中期（5世紀中葉～6世紀前半）には帆立

貝形古墳を中心とした古墳が築造され、後期（6世紀後半）以降は横穴式石室を埋葬施設とする群集墳へと変遷する。なお、前期に古墳築造が盛行した地域で大型古墳の築造が前期末には途絶える一方、中期から後期にかけて、庄内川中流域の春日井市味美古墳群、名古屋台地西部の名古屋市断夫山古墳等の大型前方後円墳が築造される。

さらに、愛知県東部の矢作川流域（西三河）・豊川流域（東三河）では前期に前方後方墳から前方後円墳へと連続する。中期には、海上・内陸交通の要衝地に単独で大型前方後円墳が築造される。矢作川流域では、後期前半（6世紀前半）に前方後円墳築造が終息し、かわって大型円墳が築造される。豊川流域では古墳の規模は縮小するが、前方後円墳の築造数そのものは増加し、後期後半（6世紀後半）には大型の横穴式石室を有する豊橋市馬越長火塚古墳が築造される。なお、矢作川流域では中期後半（5世紀後半）、豊川流域以東では後期前半（6世紀前半）に横穴式石室が導入される。前方後円墳の終息後は、直径（一辺）20m程度の円墳、方墳が造られるが、終末期古墳として傑出するものは存在しない。

ちなみに、前述の地域と飯田下伊那地域の古墳とは、横穴式石室の構造に類似点がある。例えば、無袖の横穴式石室は、木曾川流域の東濃地域（可児市、御嵩町周辺）の古墳との関連が指摘されている（白石 1988）。また、西三河の影響を受けた横穴式石室を有する円墳として下伊那郡阿南町の大畑古墳、種田塚古墳があり、矢作川流域との関連が想定できる。以上は単発的な事象であるが、詳細に関係性を探ることで、内陸部諸地域との地域間交流の足跡をみることができる。

③ 東の地域との関係（馬匹文化の敷衍）

飯田市域における古墳文化の発展は、馬の生産・管理を担う地域としてヤマト王権と強く結びついたことによるものであり、それが飯田古墳群の成立に繋がったといえる。山間部に位置する飯田下伊那地域は、令制東山道においても最大の難所であった神坂峠を控えた西に対する東国の玄関口である。

長野県に隣接する群馬県では前方後円墳に先行して前橋市の前橋八幡山古墳（130m）、高崎市の元島名将軍塚古墳（90m）、太田市の寺山古墳（60m）等の前方後方墳が築造され、続いて県西部の前橋市、高崎市周辺、県東部の太田市周辺を二大拠点として墳丘長100mを越える前方後円墳が築造される。中期前半（5世紀前半）には、両地域が統合される形で墳丘長210mの太田市太田天神山古墳が築造される。そして、中期後半（5世紀後半）以降は高崎市の保渡田古墳群や太田市・前橋市周辺に100m前後の古墳が築造される。後期（6世紀初頭）には横穴式石室が導入される。初期段階の安中市築瀬二子塚古墳の石室は、飯田古墳群の飯沼天神塚（雲彩寺）古墳との類似が指摘されている（白石 1988）。6世紀初頭は、東国でも早い段階のものであることから、今後は同石室の受容経路を考える必要がある。

さらに群馬県では、榛名山噴火の火砕流により埋没した遺跡（渋川市白井遺跡群、金井東裏遺跡、金井下新田遺跡等）の発掘調査で、火砕流の犠牲となった馬や数多くの馬のヒズメ跡が確認されており、6世紀初頭には大規模な馬匹生産が行われていたことがうかがえる。また、金井東裏遺跡では火砕流の犠牲となった子供2人を含む男女4人が確認され、成人男女の歯に残るストロンチウムの同位体分析によると、群馬県域とは異なる地質的環境の中（群馬県以西の地域）で生育した人物とされる（群馬県教育委員会 2017）。群馬県域とは中央構造線を挟んで地質的にも異なる伊那谷は、馬匹生産地としての共通性や陸上交通のルート上に位置する地域であることから、その候補地とする指摘もある（前掲）。馬匹文化をめぐる関係からは、関東からさらに東北へと繋がる陸上（内陸）交通の展開と東国経営の進展

がみえてくる。

また、馬匹文化等をもたらした渡来人に関わる遺跡として高崎市の剣崎長瀬西遺跡がある。円墳と渡来人の墳墓とされる方墳（積石塚を含む）は墓域を分けて造られており、後者からは韓式系土器や金製長鎖式耳飾が出土している。さらに、遺跡内からは朝鮮（韓）半島製馬具を装着した馬が確認されており、馬匹生産を担う人々の墓域として位置付けられる。飯田市域の北方西の原遺跡で近年発見された積石塚との比較検討により、馬匹文化の受容と地方に居住する渡来人の実態がよりみえてくる。

4. 律令時代の様相（図15）

奈良・平安時代において、飯田市は信濃国10郡の一つの伊那郡に含まれる。

伊那郡衙（郡家）に関わるのが史跡恒川官衙遺跡で、これまでに発掘調査された官衙の遺構は、正倉群と正倉を囲む溝（正倉院南辺外周区画溝）、郡衙の北限を区画する溝（郡衙北限溝）や祭祀遺構等である。郡衙の存続期間は、最も状況が把握されている正倉院の変遷から、7世紀後半から10世紀前半までとみられる。正倉院南辺外周区画溝の位置から、官衙の北東側に位置する高岡第1号古墳を避ける形で官衙施設が設置されたと考えられる。

各地区に所在する古代寺院については前項でも述べたが、座光寺地区では、古代寺院推定地として古瀬平遺跡があり、近接して8世紀中頃の金井原瓦窯跡・上野瓦窯跡などが所在する。このほか、8世紀とみられる地方色の濃い単弁四葉蓮華文の軒丸瓦が出土している竜丘地区の前林廃寺、瓦や銅鏡が出土している川路地区の辻前遺跡、時期は下るが転用された北野廃寺系の軒丸瓦が出土している松尾地区の御射山遺跡で、寺院の存在が想定できる。このように、前方後円墳終息後の寺院建立は特定地区に限定されるものではない。

集落としては、恒川遺跡群のほか、上郷地区の堂垣外遺跡、竜丘地区の安宅遺跡等で、8世紀から9世紀にかけての集落が確認されている。これら集落には居宅的性格が強い建物群があり、円面硯が出土している。該期には低位段丘のみならず上位の段丘にも集落域が拡大し、9世紀後半に集落遺跡は最も多い。しかし、10世紀中頃以降は遺跡数が激減し散在する。こうした状況は、郡衙の消長とも連動しており、律令体制の崩壊と荘園制への移行期の状況を反映するものと考ええる。

8世紀から9世紀にかけては、瓦や須恵器生産も活発化し、座光寺地区の金井原・上野瓦窯跡、竜丘地区の宮洞窯跡群一帯、伊賀良地区の土器洞窯跡、龍江地区の御殿田窯跡・上の城（上）窯跡・萩の平窯跡等が知られる。宮洞窯跡群からは風字硯、萩の平窯跡からも円面硯の破片が出土しており、硯生産も行われていた可能性が高い。竜丘と龍江の窯跡は天竜川を挟んで対峙しており、一帯は一大窯業生産地であったとみられる。

古代の文献資料は極めて限られるが、伊那郡司に係る文献がある。『類聚三代格』神護景雲二（768）年正月二十八日の格に引用された「内廩寮解」に、さらに引用された形で「信濃国牧主当伊那郡大領外従五位下勲六等金刺舎人八磨解」がみえる。これによると金刺舎人八磨呂は伊那郡大領であり、信濃国



写真10 郡衙域出土陶硯

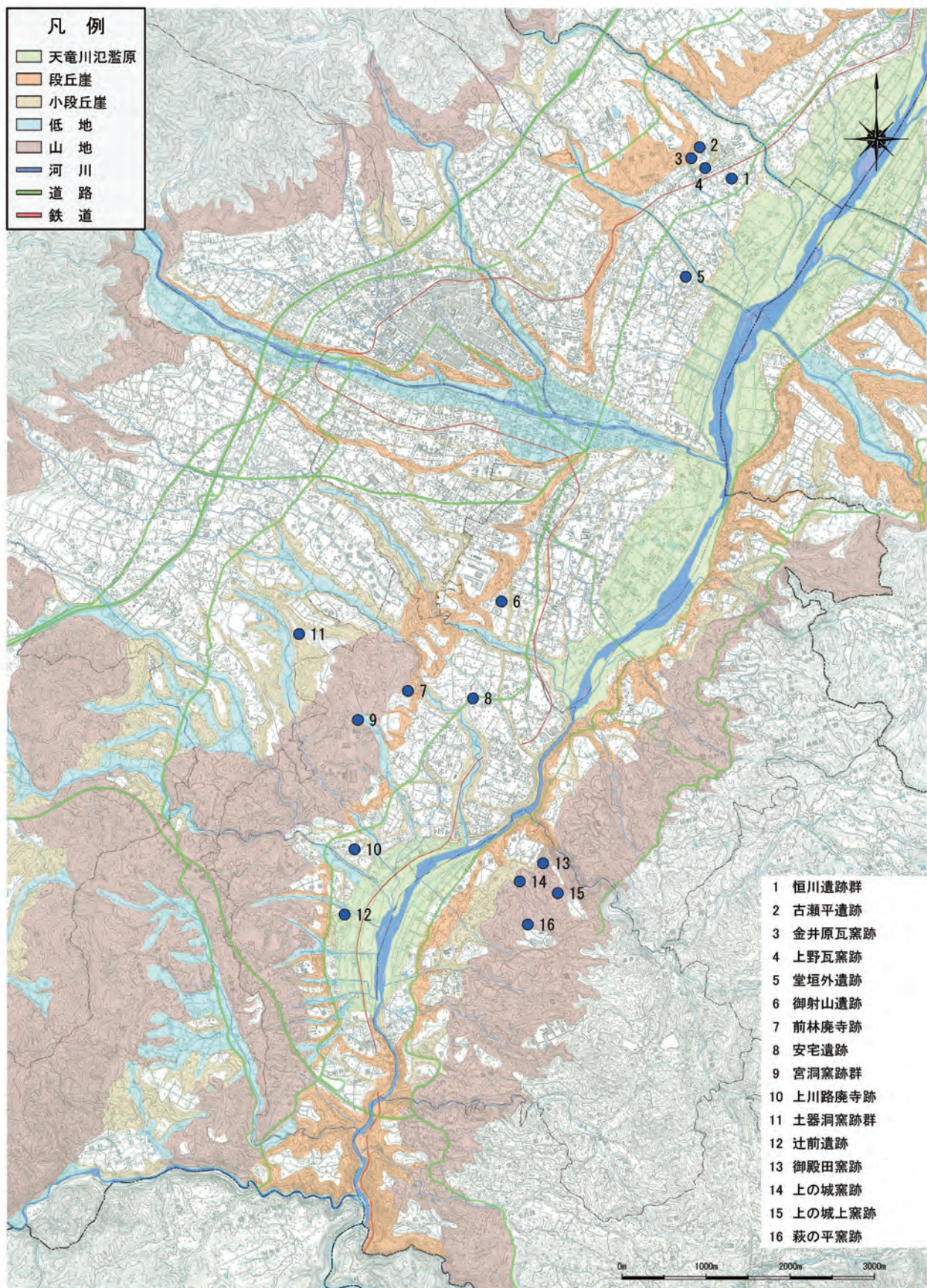


図15 飯田市域の律令時代の主な遺跡（廃寺跡・窯跡含む）分布図



写真11 神坂峠遠景（天竜川東岸から望む）

東山道は信濃国に入ると、伊那谷を北上し、上野国、下野国、陸奥国へと通じている。『延喜式』によると、信濃国の東山道駅家は、「阿知卅疋。育良、賢錐、宮田、深沢、覚志各十疋」、伝馬「伊那郡十疋。諏訪、筑摩、小県、佐久郡各五疋」との記載がある。このうち、伊那郡に含まれる駅名としては現在残る地名等から、「阿知・育良・賢錐・宮田」の4駅があり、所在地が推定されている。

5. 中・近世の様相

伊那郡衙を含めた一帯は、摂関家領の荘園である「郡戸庄」に含まれていたと推定される。この郡戸庄には、飯田市北部と下伊那郡高森町が含まれ、飯田市南部は「伊賀良庄」であったと考えられている。なお、「飯田」という地名は、長子存覚の日記に記された、元応元（1319）年に本願寺の僧覚如が飯田の僧寂円を訪れたという記述が初出である。

建武2（1335）年には小笠原貞宗が信濃守護職に任ぜられる。小笠原氏は伊賀良庄を所領とし、貞宗の子宗政は竜丘地区の鈴岡城を築城したとされ、毛賀沢川を挟んだ対岸の松尾城とともに小笠原氏の居城となった。

天文23（1554）年以降、武田氏の進攻により伊那郡全域がその支配下に入るが、天正10（1582）年の織田氏による武田氏攻略後は、伊那郡は織田氏の支配地、続いて徳川氏の支配地となった。徳川氏の関東移封に伴い、豊臣氏家臣の毛利秀頼の伊那郡支配へと変遷した。

飯田市域及び周辺地域には多くの山城が存在し、活断層による特徴的な段丘崖と河川により開析された自然地形を活かした防御施設として重要な役割を果たした。座光寺地区には南本城城跡・北本城城跡があるが、特に前者は大規模な堀切と複数の郭を重ね巡らす臨戦的な山城である。また、松尾地区と竜丘地区の境である毛賀沢川を挟んで対峙する松尾城城跡と鈴岡城城跡は、信濃守護職を巡る小笠原一族攻防の舞台である。

慶長6（1601）年、江戸幕府により小笠原秀政が飯田城に封じられ、飯田藩が成立する。飯田藩は、幕末までの間に小笠原氏・幕府領・脇坂氏・堀氏と領主が移り変わっている。飯田城は戦国時代の防御用の平山城を基に、近世に本格的に整備された城である。

明治2（1869）年に版籍奉還が行われ、明治4（1871）年の廃藩置県により飯田藩が廃され、飯田県となるが、同年には飯田城は取り壊された。

牧主当も務めていたことがわかる。古墳時代以来の馬匹生産管理を担う地として、律令時代に至っては東山道最大の難所であった神坂峠を控えた地として、中央にもその重要性が引き続き認識されていたことを物語るものである。令制東山道は近江国から美濃国恵那郡へ至り、神坂峠を越えて信濃国伊那郡に至る。神坂峠は恒川官衙遺跡から西へ約22kmの距離に位置する。



写真12 鈴岡城城跡（鈴岡城址公園）

3 節 社会的環境

1. 飯田市の概要

飯田市は、飯田下伊那地域の中核に位置する。令和2（2020）年1月末現在では、総面積658.66km²、人口100,616人（40,074世帯）である。

昭和12（1937）年4月1日に飯田町と上飯田町が合併して新たに飯田市が発足する。市制施行以来、昭和31（1956）年から平成17（2005）年10月までの間、6回にわたり2町13村（座光寺村、松尾村、竜丘村、伊賀良村、山本村、三穂村、下久堅村、川路村、千代村、龍江村、上久堅村、鼎町、上郷町、上村、南信濃村）と合併してきている。合併後も各地区に支所（現自治振興センター）と公民館を配置してきた。旧町村を単位とした地域コミュニティを重視する観点から、市制施行70周年を迎えた平成19（2007）年度に、飯田市自治基本条例、飯田市地域自治区の設置に関する条例を施行した。これにより、地域が主体となり、さらに多様な主体の参加による地域運営を行っている。

市域の産業別就業人口割合は、製造業・卸売・小売業・農林水産業の順になっている。製造業では、機械・精密が主であるが、昨今は産業クラスターを形成して航空宇宙産業の振興にも力を注いでいる。また、伝統工芸品である水引や水分含量の調整により保存性を高めた半生菓子の生産量は全国シェアの40％を占めている。農業は、耕地面積のおよそ4割が水田で、樹園地もほぼ同率を占めている。樹園地では、寒暖差が大きい気候と長い日照時間を生かして、モモ・ナシ・リンゴを中心に多種の果樹が栽培されている。中でも、干し柿である市田柿は、地域団体商標にも登録されており、地域ブランドとして全国に知られている。また、養豚や乳用牛・肉用牛を中心とする畜産業も盛んである。

2. 主な歴史文化資産

飯田市において指定等されている文化財の数は以下のとおりである（令和2（2020）年1月末現在）。

国指定・国登録（28）	重要文化財(8)	重要有形民俗文化財(1)	重要無形民俗文化財(1)
	史跡(2)	名勝(1)	特別天然記念物(2)
			天然記念物(3)
	登録有形文化財(10)		
長野県指定（32）	県宝(9)	史跡(6)	天然記念物(17)
飯田市指定（102）	有形文化財(55)	無形文化財(3)	民俗文化財(8)
	史跡(13)	天然記念物(23)	
国認定・選択（18）	重要美術品(9)	記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財(9)	
県選択（7）	無形民俗文化財(7)		

3. 社会教育施設等（図16）

（1）考古関連施設

古墳時代を含む考古関連資料を収蔵・展示公開する施設としては、市内遺跡の出土遺物を収蔵する竜丘地区の飯田市考古資料館、市内遺跡の出土遺物や座光寺小学校から移管された古墳出土遺物、上郷地区の宮垣外遺跡から出土した古墳時代の馬の全身がわかる骨等を展示公開する上郷地区の飯田市上郷考古博物館がある。さらに、自然・人文・美術分野の総合博物館である飯田市美術博物館は、「伊那谷の自然と文化」、「自然と人間のフュージョン（融合）」を基本テーマに掲げており、常設展示には原始・



写真13 飯田市美術博物館企画展



写真14 体験学習（勾玉づくり）

古代のコーナーが設けられ、妙前大塚古墳から出土した県宝「眉庇付冑」、鎧塚古墳出土の短甲等が展示されている。飯田古墳群が史跡指定された翌年の平成29（2017）年度には指定記念企画展として、『飯田は古墳の博物館』を開催した。

博物館では、調査研究を継続的に行うとともに、講演会・講座、体験等による教育普及活動や学習支援等を行っている。

このほか、学校に地区内の遺跡や古墳からかつて出土した資料が学習教材として寄贈され、收藏されている場合がある。座光寺小学校については前述のとおりであり、竜丘小学校、三穂小学校、上久堅小学校等にも地区所在の古墳出土遺物が保管されている。特に、竜丘小学校では一室を設けて金属製品や埴輪、土器等が保管され、その一部は竜丘公民館等で展示公開されている。これらは発掘調査によるものではないが、『下伊那史』に記載され、出土した遺跡や古墳が知られているものも多いことから、古墳文化を考える上で貴重な資料といえる。

（2）その他の施設

上記以外の施設として、飯田市公民館及び各地区公民館、飯田市立図書館、飯田市歴史研究所、飯田文化会館がある。これらには、考古関連資料の收藏等はないが、「伊那谷の自然と文化」をテーマとして相互連携を図りながら、専門性を活かした事業を展開している。さらに、伊那谷研究団体協議会等の民間研究団体や多様な主体と協働した学術研究、教育普及、保存継承活動を進めるとともに、地域づくりや魅力ある生活文化の創造・発信のための取組や、文化・芸術等を通じて地域を担う人材の発掘、育成を図っている。

4. 交通（図16）

現在、飯田市へのアクセスは中央自動車道が主要なルートとなっており、市内に所在するインターチェンジは飯田インターと飯田山本インターの2つがある。新宿からの所要時間はおおよそ4時間、名古屋からはおおよそ2時間となっている。また、飯田市と静岡県浜松市とを結ぶ三遠南信自動車道建設が進められている。このほか、一般国道153号は愛知県豊田市を経て名古屋市へ、同151号は愛知県豊川市、同152号は静岡県浜松市に至る。

また、東京と名古屋を結ぶリニア中央新幹線は、その開通が令和9（2027）年に見込まれており、市内上郷地区には長野県駅が設置される。これにより、東京からの所要時間はおおよそ45分、名古屋からはおおよそ25分となる。ほかに、長野県上伊那郡辰野町のJR辰野駅と愛知県豊橋市のJR豊橋駅を結ぶJR飯田線は、昭和12（1937）年8月20日に全線開通し、平成29（2017）年10月で80周年を迎えた。

こうした高速交通網の整備は、交流人口の増加、産業振興、観光振興などの面で期待されるが、地域の大きな変化を伴うことから、明確な地域ビジョンを掲げた長期的計画の策定・実施が重要となる。

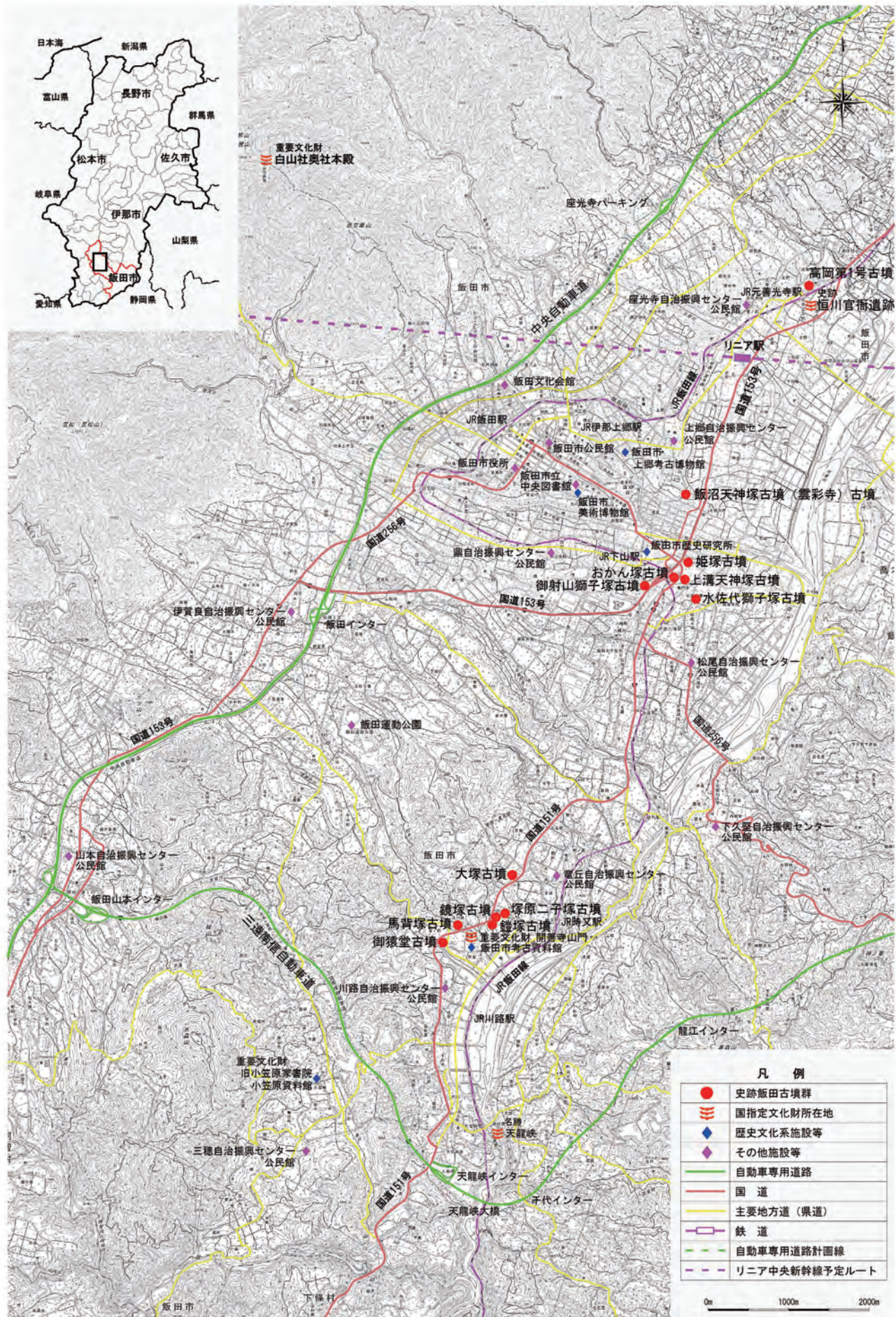


図16 交通・社会教育施設位置図